慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「日本文化史」(松本芳夫著, 慶應通信發行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.3 (1956. 12) ,p.122(350)- 123(351)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

「日本文化史」（松本芳夫著　慶應通信發行）

本書の前半「日本文化史」は著者が義塾通信教育の教材として執筆されたものであり、後半附錄「革新と傳統」、「國史における筑紫」、「傳統としての日本文化」、「外來文化の攝取について」、「わが國の獨立について」の五篇は何れも講演の要旨を筆錄したもので、その中後三者は通信教育の補助教材「三色旗」に掲載され、「國史における變革とその主動者」、「戰記物語にあらわれた中世武士と戰爭」の二篇は義塾文學部史學科の機關「史學」に發表されたものである。

文化史とは要するに人間の生活史そのものではあるが、普通われわれが文化史というのは宗教、學問、藝術等の面にあらわれた人間生活の歷史であり、政治、外交、軍事等の面はこれを政治史として取扱うのである。文化史と政治史の區別は、右の如く對象の區別に基くとともに見方の違いにもよるのであり、文化史に於ては現象の成果、意義、價値等に視點をおき、政治史に於ては人物、事象の行動、過程等を重視するのである。しかしこれはどこまでも歷史を理解するための便宜上の手段であつて、われわれの現實生活は截然と兩面に區別される筈のものではなく、兩者が密接な連關を有するものであることはいうまでもない。結局著者は文化史と政治史とは互に他を予想するのであつて、政治史の理解なしには文化史に通曉することはできないという見解から、「原始文化」から「江戸時代の文化」に及ぶ本書の前半「日本文化史」を敍述されているのである。

後半附錄は七篇から成つているが、「革新と傳統」は日本史上の大變革としての大化改新、鎌倉の開府、建武中興、明治維新はすべて復古の精神に基いて達成されたものであつて、一面極めて保守性が強く、傳統を破壞するよりはむしろ傳統を活用したところにその著しい特色があることを說き、「國史における筑紫」では筑紫の西陲としての地理的位置がその歷史的意義を決定する最も重大な條件であり、第一に西紀前第二世紀末漢がその勢を朝鮮半島に及ぼし、その文化がわが國に傳わつてから日宋交通に至るまで文化流入の門戸となつたこと、第二に筑紫が中央から隔離していた關係上、政治的には古くから特殊な勢力圈とでもいつたようなものを形成していたこと（耶馬臺國や熊襲、隼人の活動を中心に述べている）第三に新しい勢力の發祥地となつたこと（神武天皇の東征物語を中心として說いている）等の諸點について筑紫の歷史的意義を明にし、「傳統としての日本文化」は新しい文化の創造には、その基盤たるべきよき傳統をもとめなければならない

ことを教え、「外來文化の攝取について」では多くの例を引いて、新しい文化の創造は新鮮な外來文化の攝取によつて、異質の文化の受容によつてなされる所以を說き、「わが國の獨立について」はここでも實例に則して、就中「假令ひ或は其文明をして頗る高尙のものならしむるも全國人民の間に一片の獨立心あらざれば文明も我國の用を爲さず之を日本の文明と名く可らざるなり」という「文明論之概略」の言葉を引用して、個人も國家もその完全なる生長には獨立心が必要である所以を語り、「國史における變革とその主動者」では日本史上の三大變革卽ち大化改新、鎌倉の開府及び明治維新に於ては社會階級の交替は全く認められず、變革の主動者は何れも在來の特權階級であつて決して被治者階級ではなかつた。大化改新は貴族によつてなされた變革であり、これによつて部民は解放されたが、それは與えられた自由であつてかち得た自由ではなかつた。鎌倉開府も武家の勝利を意味して、一見階級の交替のようにも見えるが、武家の前身たる豪族は貴族に由來するもので必ずしも被治者階級ではない。更に明治維新に於てもその改革は新興階級によるものではなく、武家自らの手によつてなされたものであつた。かくの如く變革に際して下剋上の見られなかつたところにわが國に於る變革の特色がある。これは如何なる理由に基くものであろうか。一つには變革の主動者が有識者であつたからである。わが國の變革が一面進步的でありながら他面保守的であつたのは、その主動者が有識者たる治者階級であつたからであると著書は結論している。最後の「戰記物語にあらわれた中世武士と戰爭」は中世の武士が如何なる態度で戰場に臨み或は如何に戰爭を見、如何に戰爭に武士道精神が發揮されたかを所謂戰記物語を通して考察したもので、そこには傳統としての日本人の情操が、武士の特殊な生活によつて鍛錬された倫理觀として自ら發露してをり、また武士の本然の姿が最もよく描かれているということを說いたものである。

本書はそれぞれその執筆の動機を異にする數篇を含んでいるが何れも固定した視點に支えられた文化史觀によつて貫かれ、隨所に著者の識見が窺われ啓發されるところ多大なるものがある。大方に推奬する所以である。

（淺子勝二郎）

蝦夷　古代史談話會編

朝倉書店發行、昭和三一年五月十日刊

本書は先に刊行された同じ古代史談話會編の『耶馬臺國』と同一シリーズの圖書で、古代史研究第二集として發刊されたものである。布裝幀、A5版　本文二六二頁、アート圖版二頁で、卷末に『蝦夷關係文獻』と題し明治以降に發表された蝦夷關係の研究文獻が、著者、題名、掲載誌の順で一二頁に涉て記されており、